

河内長野市制施行 50 周年記念

第 4 次総合計画まちづくりフォーラム報告書

平成 16 年 5 月 15 日(土)午後 1 時 30 分～ 4 時
河内長野市立市民交流センター(キックス) 4 階イベントホールにて開催

目 次

- 1 橋上義孝市長あいさつ 1
- 2 絵画・作文コンクール入賞者 3
- 3 「河内長野市を元気にする提言」の発表 4
- 4 基調講演「協働による未来のまちづくり」 7
- 5 パネルディスカッション
「河内長野らしさを活かした元気なまちづくり」 18

1. 橋上義孝市長あいさつ

みなさんこんにちは。ただいま、ご紹介をいただきました、河内長野市長の橋上でございます。

本日は、河内長野市制施行五十周年記念事業の一環と致しまして、第四次総合計画まちづくりフォーラムを開催しましたところ、本当に多数の方にご参加を賜わりまして、誠にありがとうございます。

さて、昭和二十九年四月一日に市制が施行されました本市は、この四月をもちまして、ちょうど五十歳を迎えたわけでございます。

この間、数多くの困難を乗り越えて参りまして、一人前の都市に育てて頂きました。市民の皆さんのご協力に思いを馳せながら、本市のまちづくりを考えるきっかけとするため、様々な記念事業を企画いたしました。本日のフォーラムも、その一つとなるわけでございます。

さて、本市では昨年度から、新たなまちづくりの指針となります、第四次総合計画の策定作業を、進めておるところでございます。

現在の第三次総合計画では、「人・まち・緑 夢くうかん 歴史と文化の生活創造都市」を将来像といたしまして掲げ、ここキックスやコミュニティセンターの建設、あるいは環境基本条例の制定など、様々な施策に取り組みまして、多くの成果をあげることが出来ました。

平成8年度にスタートしたこの計画も、平成17年度には目標年次をちょうど迎えるところでございますが、現在、私たちは、計画スタート時点から、大きく変化した、複雑かつ厳しい状況に立たされているわけでございます。

あまりにも長引く景気の低迷、ますます進行する少子高齢化、あるいは人口の減少、それらを原因とした危機的な財政状況など、また、地方分権時代にふさわしい、自立した自治体経営を行っていく上で、極めて難しい、局面を迎えております。

このような局面を打破するために、徹底した行政改革、あるいはまた、財政の健全化を進め、その上に立って、将来のまちづくりのビジョン、構想を打ち立てていかなければなりません。

そのためには、より多くの意見をお伺いいたしまして、できるだけ多くの方に参画をしていただくなど、市民の皆さんとの協働による計画づくりが、これまで以上に今、求められております。

このような観点から、昨年、市民アンケートや小・中学生などによります絵画そして作文コンクールなどを実施いたしまして、この三月には、まちづくり市民会議の皆さんによる「河内長野市を元気にする提言」を頂くなど、市民の皆さんとの協働作業を今、進めているところでございます。

本日のフォーラムも、そういった市民参加、市民との協働の一環といたしまして開催を

いたしました。

これより、コンクールの表彰をはじめ、市民会議からの提言の発表や大阪府立大学の増田先生のご講演、そして、パネルディスカッションなどを予定しております。

どうか、最後まで参加をいただきまして、河内長野の未来のまちづくりをともに考える契機となりますよう期待を申し上げます、ご挨拶といたします。

ありがとうございました。よろしくお願いいたします。

2. 絵画・作文コンクール入賞者 (敬称略、学校名・学年は応募当時)

絵画・小学生

最優秀賞：宮花優（三日市小 4 年）
優秀賞：車谷有梨（高向小 6 年）
優秀賞：高野美摘（三日市小 2 年）
優良賞：植田敦子（高向小 6 年）
優良賞：廣田慧（天見小 3 年）
佳作：高口尚子（南花台東小 4 年）
佳作：谷川愛季（長野小 3 年）
佳作：本山勇亮（加賀田小 2 年）
佳作：佐々木遥（南花台西小 1 年）
佳作：竹田優（南花台西小 1 年）

作文：中学生以上

最優秀賞：橋田佳織（長野中 3 年）
優秀賞：中野真由美（東中 3 年）
優秀賞：重命恵美（清教学園中 2 年）
佳作：大原田雅美（南花台中 2 年）
佳作：浅井壮馬（美加の台中 1 年）



3. 「河内長野市を元気にする提言」の発表

発表者

まちづくり市民会議会長：谷口幸生

第1グループリーダー：木之下 純子

第2グループサブリーダー：川口 純子 (敬称略)

谷口：みなさん、こんにちは、谷口です。それでは早速、お手元の河内長野市を元気に

する提言をご覧ください。提言は、
提言1：観光・産業・観光グループ、
これを木下さんの方から、そして、
提言2：福祉・教育・全般グループ
を川口さんの方から早速、発表させていただきます。では、お願いします。



木下：第1グループでは、環境と産業、観光をテーマに河内長野市が、どうすれば元気になるか話し合いました。まず、環境、産業のオンリーワンを探し、その資源を活かした観光のまちに向けて、具体的に実現可能と思われるアイデアを出し合いました。図は、具体例を実現へ向けて話し合った内容をまとめたものです。環境、産業、観光について、30以上出されたアイデアです。私たちの住む河内長野市は、大阪を一望する岩湧山や千石谷など、緑豊かなまちとして存在し、南天の里・天見地区、画家が描きたい里山などの自然、また、歴史的形態からも府下有数の文化財を有するまちでもあり、高野街道ひとつをとっても、歴史的に趣き深い箇所など、活かす資源は多くあることがわかりました。しかし、現状は残念ながら、奈良、京都のような名勝はないということになりました。お土産となる名物、食事処も探しましたが、あまりありません。駅前の空き店舗のイメージダウン、街中のごみなど、それからPR不足などの問題点が見えてきました。観光でまちを元気にするには、問題点を解決して、それぞれのアイデアを具体的に実現していくことです。

そこで、誰がそれを実現していくのかということになり、市民、事業者、行政の協働が重要だということになりました。市実施のアンケートにおいても、注目する

点が2点ありました。ひとつは市民の好感度、まちを愛する理由です。85%の人が、自然が多いことを挙げています。また、高齢社会を迎えて、健康への不安も高まっています。そこで、元気なまちづくりを進めるためには、自然を守りながら活かした、健康を重視した産業であり、観光であることが大切であると考えました。そこで、健康なまちのイメージは、歩くまちが良いということになりました。自然や歴史的遺産に囲まれ、笑顔で安心して歩き回るまち、ハイキングに来てほしいまちは、歩くことでふれあいや相手への思いやりが生まれ、まちからごみも消え、高齢者も子供たちも安全に暮らせるまちになると考えました。自然と共生し、健康と観光に重点を置いて、まちづくりを進めれば、私たちが安心して、いきいき笑顔で暮らせる、健康文化都市が実現します。わたしたちの財産である自然や歴史的遺産を、観光資源として守り、保全し、活かしていくためには、市民と行政、地元企業、事業者はもとより、近隣の学校との協働が必要と考え、提案します。第1グループの提案です。次は、第2グループの提案を川口さんをお願いします。

川口：第2グループは、福祉と教育、そして、全般というグループです。9人のメンバーは、先に申しましたように、福祉、教育、全般という中で、こうすれば河内長野が元気になるのではという、それぞれの考えや思いを持って集まった人たちです。1回目の集まりでは、それぞれの思いや、持っている情報を出し合いました。最終的には、河内長野を元気にする提言に結びつけていくためと、メンバーの意見をよりたくさん出すために、ブレインストーミング方式で、小さなカードに河内長野の課題と思われることを書き出してみました。そのカードを項目別に整理したのがこれです。これをみんなで眺めながら、それぞれの課題が解決できたら、どんなまちになるかということイメージしてみました。イメージしたまちが、きっと、住みよいまちにつながるのではないかと、老人、福祉、障害者の項目では、みんなに優しいまちになるのではないかと、ボランティア活動という項目においては、社会活動に参加しやすいまち、行政と市民の協働についての項目では、みんなの意見が行政に伝わるまち、近所づきあいについての項目では、人の心に触れ合えるまち、学校と地域の関わりの項目では、元気な子供が育つまち、その他の項目では、安心して住めるまち、をイメージしました。

これをベースに、協議を重ねた結果、心のふれあいとみんなに優しいまち、安全で元気な子供が育つまちという、あるべきまちの姿が見えてきました。しかし、河内長野をこのようなまちにするためには、行政の資料などから、他市に洩れず、少子高齢化、財政難という大きな課題があります。加えて、市民の高齢化等により、ニーズの多様化がさらに広がると思われる上、行政だけではこれに対応するのは難しいと考えられます。

そこで、私たちは、市民と行政が協働することが必要であるという結論に達しま

した。この協働を推進させるためには、市民が楽しみながら、なおかつ、充実感を持ってサービスし、サービスを受けることが大切だということです。市民と市民、市民と行政の協働は、お互いに顔の見える、心の通う距離で行うべきだと考えます。したがって、そのために必要な情報は、自治会など、地域に密着した単位で共有し、サービスを提供する人材についても、専門家ではなく、地域に根ざした知識と経験の豊かな人たちがそれぞれあたり、なお、次世代の育成に関わっていけたら、充実感を持った暮らしにつながっていくと考えます。市民が市民にサービスすることにより、幾分なりとも経費の軽減が図れますが、財源については、地域企業の社会貢献を含んだコミュニティファンドなどの検討が必要と考えられます。以上が、第 2 グループからの提言です。

谷口：こちらの絵図は、資料の 6 ページにあります。ご参照ください。以上のことを推進していくために、情報の発信、活動団体、地域住民、行政、企業をつなぐコーディネート、各団体の活動についての助言や、人材の育成を行う継続可能な組織、一言で言えば支援組織になりますが、その設立が必要と考えました。それぞれのいい面が、ヒト、モノ、コト、カネと総合的な形で相乗効果を上げて、より良いまちづくりを行っていく。そのことに誇りが持てる、あるいは育ったことに誇りが持てる、元気印の河内長野を実現していきたいと思います。また、皆さんと一緒にあって、取り組んでいきたいと思います。以上で終わります。ありがとうございました。

4. 基調講演「協働による未来のまちづくり」

大阪府立大学大学院教授 増田 昇 氏

1. まちづくりの時代的変遷

ただいまご紹介に預かりました大阪府立大学の増田でございます。今回、第4次総合計画まちづくりフォーラムで基調講演という大役をいただきまして、まずは市の皆さんに御礼申し上げます。ここで、40分ほどお話をさせていただきたいと思っております。皆さんのお手元に、細かい字ですが、3枚ほど、資料を提示させていただいております。私の専門ですが、先ほどご紹介がありましたように、なぜ農学部の先生が、協働による未来のまちづくりを話すのかという話ですが、もともと造園学というのが専門で、今は造園学から、公園計画であったりとか、あるいはまちの緑化であったりとか、あるいは都市周辺部に存在しています自然環境の保全であったりということを、専門にしております。そういう中でですね、特に、最近ではまちの緑化にしろ、里山の保全にしろ、いろんな形で皆さんとともに歩むという、協働によるいろんな仕組みというのが急速に進行しておりますし、そうでないとやっていけない部分、あるいは、自らの環境は自らで守り育てるといったようなことがかなり定着してきました。そういう風な視点からですね、今日は少しお話をさせてもらおうかなという風に思っております。先ほど、あの市長さんの話の中にも、協働という概念が出てきました。あるいは、市民の提言の中からも、基本的には充実感を持った生活とか、誇りを持った生活をするためには、市民と市民、あるいは市民と行政との協働が基本になるのではないかという話がありました。少し蛇足になるかもしれませんが、まさに一言で言うと、そういう話をしたい訳ですが、少し、専門の立場から、なぜそんな時代背景になってきたのか。あるいは、日本とか世界で今、まちづくりの方向性というのが、どうなっているのか。あるいは、先ほどちょっと紹介いただきましたように、少しこの近隣で総合計画であるとか、協働のまちづくりの中で、こんな事例もありますよという風なことを紹介しながらですね、40分ほどお話をさせてもらおうと思っております。

この会が始まる前も、河内長野の歴史というのが、スライドで紹介されておりました。そういう状況を少し整理してみますと、戦後ですね、1940年代50年代というのは、どちらかという、戦後復興に明け暮れたと言ってもいいかもしれませんが、1960年ぐらいから高度経済成長に入り、都市への人口集中であるとか、あるいは、都



市の外延的拡大みたいなものが起こってきました。こういうところで整備されたのは、最低の居住水準を守りましょうという形の中での都市整備が一方で進んだわけですね。

そういう一方で、もうひとつ、われわれが環境に気づいたというのが、ひとつのきっかけが、公害問題を中心に、環境というものが着目され出したというのも、1960年代の終わりぐらいからです。従いましてこのときの環境、公害問題というのは産業公害ですね。今の環境問題とは少し違うわけですが、そのあたりから、環境、あるいは自らが住んでいる環境をどう守り育てたらいいのかという芽生えが、もうすでに1960年ぐらいにあったと言われております。

70年代に入りますと、もう少しそれが進んで、特にこの河内長野市さんの丘陵部でのニュータウン開発、新市街地の開発というのが急速に進んだと思いますが、大阪府下でも千里ニュータウンができたり、泉北ニュータウンができたりという、ちょうど、ニュータウン開発ですね、それに伴って交通基盤が整備されていく。都市は少し便利になって美しくなっていくという時代、機能的で便利で清潔になる。ただし一方でですね、どういうことが起こったか、先ほどのスライドもそうですけれども、非常に風情のあった駅前がですね、河内長野という名前を見ないとどこの駅かわからないような駅前になる。あるいは、自分の住んでいるまちが、名前を見ないと隣のニュータウンに行ってしまうような、そういう、形態。これは、日本全国でそういう風に進んだわけですね。無機質だとか均質だとか。これは国の行政のやり方にもあった訳ですが、そういう時代が1970年代。

一方、公害の方は、世界でも評価されているのが、産業型公害は、70年代にかなり克服したという風に言われている。そういう時代を受けて、たとえば世界ではどんなことが起こっていたかということ、70年代のはじめに、地球サミットというものを覚えていらっしゃるかもしれません。92年に、1992年にリオで宣言がありました。これと同じ宣言、ほぼ8割方一緒の宣言が、1972年にもうすでにされています。これはストックホルム宣言といいますが、このとき、ヒューマンルネッサンス、人間復興戦略という形で宣言された訳ですね。それから20年経って地球環境サミットが開催されましたが、世界の動きの中では、70年ぐらいからぼちぼちと、無秩序に無制限に拡大していくのにちょっと心配やなめという風なことが起こっていた訳ですね。日本はまだ、ずっと続きます、それが。70年代、今言ったように続きまして、80年代に入って少しですね、アメニティという言葉とか景観とかいう言葉がもてはやされるようになって、美しいまちとかそういう話が出てきます。下水の整備であるとかいう風な、衛生環境についてもそういう話が出てきます。これは80年代ですね。ここまで、どちらかというと、右上がり型の、計画ですね。人口は増えますよ、財政は、給料は上がって行きますよ、財政は要するに、経済は発展しますよという右上がりの、まちづくり、というのが80年代ぐらいまでですね。

皆さんご存知のように90年代に入って、バブル経済が崩壊します。その後今、市長さんの話にもありましたように、長期の低迷時代というのが続いているわけですが、こ

うということが起こるわけですね。そういう風な中で考えていくと、これから、たとえば少子高齢化が起こりますという話の中でも、われわれが考えていかなければならないのが、成長をどんどんした時のまちづくりから、どうしたら成熟していくような、心の豊かさと言いますか、ものの豊かさに対する真の豊かさみたいな話の方、成熟期の都市づくりへどう、われわれ踏み出していったらいいのかという時代に、大体 1990 年ぐらいから入ったという風に言われています。

それに一番気づかせてもらったのは、ひょっとしたら阪神・淡路大震災かもしれません。ああいう、神戸という近代都市に、自然の驚異の中でああいう事故が、自然災害が起こりました。われわれずっと、日本の土木技術、建築技術、都市づくりの技術を、非常に信頼していた訳ですけど、ある部分、自然の持つ脅威、あるいはすごさというのには勝てないなど、いう風なことも気づいた訳ですね。そういう話の中から、急速に都市づくりそのものが、成熟型へ変わっていく。その中ではたとえば、都心部ですね、河内長野で言いますと駅前みたいなそういうインナーシティの部分で、商店が今閉まっているとかいう風になっていますけれど、その辺の持続性みたいなやつをどう考えていったらいいのかと。ニュータウンではなくて、生活、先ほども充実した生活だとかありました。生活をしていく場として、もう少し都市を見られないかと。寝る場所ではありませんよと。あるいは、働く場所だけでもありませんよと。本当の自分の生活全体として、どう都市を考えたらいいのかということへ変わっていった。あるいは、少子高齢化社会の中です、ひょっとしたら、人口の減少だとか財政の苦しさだけではなくて、反対に見ると、自由時間の獲得とですね、生きがいづくりへとチャレンジできるという風な、要するに時代が来たという風にも考えてもいいかもしれません。

あるいは、もう一方で、先ほどから出ています環境問題が、もっと、地球規模での環境問題という話の中で、河内長野は非常に、自然環境が豊かです。水もおいしいですし、空気もおいしい。目も緑で潤いがあるという風なことですけれども、まあ、そういう意味の中で、これからエコロジーですね、何でもこのごろ商品開発にエコという言葉がつかます。それはエコロジーのことですけれども、生態的にもう少し、安定した、あるいは生物の、われわれ一員として、どう、かかわっていけるかという環境重視みたいな形へ転換している。

もうひとつは、先ほど、市長さんの話にもありましたように、地域分権型社会の働きという話がありますね。これはどちらかというと、中央集権的に、トップダウン的にずっとやってきて、画一化とか無機質化が起こってきたわけですが、もう一方の中で、地方分権の動きの中で、もう一度、地域の固有性とは一体何かとか、個性とは何かとか、あるいは、誇れる資源って一体何かという、地域の固有性とかですね、皆で支えあっていくための地域力みたいなやつが求められる時代に来たと。これが、今の置かれている状況ですね。

もう一方では、安全・安心というのも震災を契機に、出てきます。われわれ日本は、ど

ちらかというこの安全についての概念というのはものすごくあって、安心に対する概念は少なかったわけですね。危険性というのは、自然災害に対する危険性と、悲しいかなもうひとつは防犯という危険性も一部は考えないといけない時代が来たというのが、今置かれている立場かなと。こういう、時代認識の中で、2001年以降、あるいは21世紀の中で、われわれどう歩んでいったらいいのかと。こういうことを踏まえながらですね、少し考えていきたいなと思っております。

2. 成熟型社会での取り組み

2.1 コンパクトシティ

こういう話の中で、少し成熟型社会での取り組みということで、これは、海道先生という方が、学芸出版社の本の中でまとめられています。今までの考え方と180度違います。今までは、大きいことがいいことだという話で、都市もメガロポリスとかメトロポリスとか言って、巨大都市がいいとされたわけですね。あるいは、都市の繁栄だと。それに対して今言われているのは、むしろコンパクトにきっちりまとまったまちの方がいいのではないですか。もっと、人間サイズのまちの方がいいのではないですか。これは、さきほど歩くまちっていう提案がありましたけれども、そういうところとも相通ずる部分があるわけですね。これ、難しい言葉で言うと、全てのことをダウンサイジングしろ、もっとサイズを小さく小さくしろという話ですけども、街づくりの中ではこんなことが言われています。

欧米では9つぐらい挙がっています。コンパクトシティというのは、原則として9つ、考えなければなりません。高い居住と就業などの密度とか、複合的な土地利用の生活圏とか、自動車だけに依存しない交通とか、多様な居住性と多様な空間とか、独自の地域空間とか、明確な境界を持ちましょうとか、社会的な公平性とか、等々9つ挙がっています。で、これはまあ、日本的に捉えた、日本型のコンパクトシティって一体何でしょうかというのをまとめられている訳ですけども、ひとつは、地域福祉もそうですけれども、福祉行政そのものがやっぱり自分の住んでいる、要するに地域生活圏、近隣生活圏、ひょっとしたら小学校区って呼び変えてもいいかもしれませんけれども、そういう中でひとつの都市を、ある偉い先生は、都市の中にもっと村をいっぱい作ったらいいという話をされる先生もいらっしゃいます。自分の住んでいる身の回りで、まちをもう一度再編してみませんか。それが段階的に生活圏として大きくつながっていきますよという、段階的な圏域で都市に、あるいは地域を再構成していくみたいなものを考えていったらどうですか。あるいは、交通と、交通計画と土地利用との結合、これもまさに、駅前生活圏みたいなものは今、非常に発達してきているわけですね。今までの行政というのは、どちらかという、小学校区を均一に、展開をしていくと。ただし人間、われわれの生活というのは、駅前を中心に生活圏が発生したりしています。そういう、交通計画と土地利用との結合を強めないでだめですねとか、あるいは、われわれ、特にこの河内長野の丘陵部の開発というのはどちらかという、住宅の機能に特化しています。住むという行為ではなくて、どちらかという

寝るという行為しか発生していない。そうではなくて、多様な機能と価値を持ったような都市センターゾーンみたいなやつを持続させていって、暮らしというのは全部ですね、そこに歴史とか文化とか出会いとか買い物とか、食べるとか思い出とかそういうことを、こう、多機能的に重なったようなまちみたいなものを考えないとだめですね。

5番目ですけれども、これはまさに日本のまちの仕組みはどうなっていましたかという話ですけれども、これは、歩くという行為。これで町割りみたいなものができていたわけですね。たとえば、1丁区画みたいな「1丁」という概念があって、それがちょうど、100区画ぐらいのところで歩クリズムに合うような、歩く、徒歩の時代の町割をいかさなといけませんよと。あるいは、こういう話ですね。

6番目に、さまざまな用途や機能、タイプの空間を共存させていく。今、生態学という話がたくさんでてきたり、ハイブリッドという言葉がこのごろよく流行ったりしていますよね。雑種、交ぜるという意味ですね。今までのわれわれの考え方というと、どちらかという非常に洗練されたひとつの機能に特化して、そのひとつの機能を高めていったらものすごく良くなりますと信奉していた訳ですね。これは、近代主義と言ってもいいかもしれない。やあ、待てよ、もう少しやっぱりいろんな機能を交ぜ合わすことによって、もっとトータルとしての、効率性が高まるのではないですかという考え方が、ポストモダニズムみたいな中で出てくる。まさにそういう話がまちづくりの中でも、要するにどうやっていろんな機能を交ぜ合わせて楽しめるのか。あるいは、そこでの効率性みたいなものを考えないといけないというのが6番目ですね。

もうひとつはやはり、まちに誇りを持ったり、あるいは人に訪ねてもらったりしようと思うと、美しくなければいけません。まあ、そういう面では7番目に書いてあるのが、アーバンデザインって、これは都市のデザインという意味ですけれども、アーバンデザインの手法を適用して、美しい快適なまちをつくる。これ、今ちょうど、日本の国土政策そのものも、ガーデンステイアイランドという、ガーデンアイランドという構想が出されてですね、美しい国土環境づくりというのが、再度スタートしている。やはり、みなが誇りを持とうと思ったら、美しい。先ほど、ごみの話もありましたけれども、美しいところにはごみは捨てられない。つまり、ごみのごみを呼ぶ訳ですね。美しいところにはごみを捨てられません、心情的にですね。そういう意味もあって、美しいまちをどう作っていくかと。

もうひとつは、コンパクトシティの非常に大きな話で、都市を無秩序に大きく大きくしていくよりも、発展をちゃんとコントロールして、環境と共生させないといけませんねと。周りがある、要するに太陽の動きとか、雨とか風とか、山とかいうことをベースにしながら、きちりコンパクトに、まとめていかないといけません。これは、河内長野さんの構造というのは、非常にクラスター型の構造という、ブドウの房型の構造になっていますので、これをちゃんとやっていけるポテンシャルはすごくある。

さらに都市を強化する。あるいは、自治体空間総合計画に基づく、これが先ほどから出ている、協働による経営体みたいな話ですね、プロデュース機能という話が提言でありま

したけれども、こういう都市経営を努めていくときに、いろんなことを総合化しながらやっていく。こんな10個位の、まちづくりコンパクトに都市をどう持続させるかというものをまとめられているような考え方もあります。

こういうコンパクトシティという考え方がいろんな意味で着目されています。今までのメガロシティや、メガシティに対してですね。いろんな海外の研究者なんかとも交流して、コンパクトシティってどうですかねという話を海外の研究者としますと、あほ言いなさんなど、日本はもともとコンパクトシティでしょと、自分らの足元をちゃんと見たほうが解決策ありますよという話によくなるんですね。まあ、われわれ、どちらかという狭い平野の中で非常にコンパクトに過ごしてきたという伝統と歴史を持っていますので、その辺自信を持ってですね、コンパクトシティをもう一度再発見したらどうでしょうかという議論によくなります。そんな視点が少し整理した部分です。

2.2 八尾市総合計画の特徴

次にですね、この近辺で、少し今、検討がスタートした4次総合計画、これと非常に相通ずる部分があるので、八尾市の事例をお話します。八尾市はですね、やはり、八尾新世紀市民フォーラムという、ここで言う市民会議を構築されてですね、で、そこら出てきた提言、21世紀のグランドデザインに向けてこんなまちへという、提言を受けて、まちの将来像にかなり大きく反映をさせています。もうひとつは、職員さんも同じように自分たちで、将来のまちはこうあったらいいですねという職員提案みたいなものですね。で、市民提案ですね。こういうもの。さらに、今回もアンケート調査されたということですが、でも、そういう、調査。これを受けて将来都市像というのを作っている。非常によく似たやり方をされていて、だんだんやっぱり、参画型みたいな形のまちづくりが進んでいるというのがよくわかるかと思います。これがひとつの八尾市の特徴ですね。みなさんのところにも少し、資料のところには、2ページ目の2の2のところを書いてあります。

この時に話された話ですね。これもある部分、共通する部分があるかと思いますが、ひとつは先ほどもありましたように、歴史とか自然というのは、河内長野は非常に豊かだと。で、それをやっぱり地域資源という風に、これ、まだ埋もれていると言ってもいいかもしれないですね。あるんですけども、やっぱりそれがちゃんと、機能してないとか活性化していない。やっぱり地域資源みたいなものを活かしながら、循環型の都市づくりみたいなものやっぴかかないといけません。あるいは、先ほども少し「ジリツ」都市というのが市長さんから話が出ていました。「ジリツ」のリツは、リズムの「律」という捉え方もできますし、「立つ」という風にも考えられます。やっぱりある一定の地域の中でのリズムを、自律したリズムを持ったような、市民主役の都市づくりをしないとイケないですね。

もうひとつは、前提としては、みながやっぱり公平性の原則の中で、お互いがお互いを尊びあうという、その部分が要するにベースになって展開していきますねと。相通ずる部分と違う部分もありますけれど、ひとつはこういう視点が参考になるのかなと。これは私も参画させていただいていたんですけど、そんな話です。

その中で特に、先ほどの市民提案さんの方で出ていました、プロデュース機能、これは地域、あるいは市域全体でプロデュースするのか、あるいは地域ごとに、たとえば河内長野市さんは、大阪府下でも3番目に、市域が広いわけですね。そうするとまあ、4ブロックぐらいに分けて、東西南北の4ブロックぐらいで考えるのか、いずれにしても、地域で経営するという、市も、企画経営室という風な非常に斬新な名前をつけられています。通常あの、普通の行政体では、企画調整課みたいなところが多いのですけれども、そういう、経営という概念ですね。皆でまちをどう持続させていきますかと。で、そのときのやりかたというのは、市民、さらに企業も、当然、地元の企業というのは非常に大事で、市民、企業と行政、これの参画の仕組み。この、ひとつの前提はやはり、お互いに情報を共有することですね。これ今、情報の公開条例だとかいろんなところでできていますけれども、そういう情報の共有の仕組み、参画の仕組み、それと、効率、創造的な行財政運営と、こういうことがあって多分、地域経営ができる。これを地元でどうしていったらいいのかが、先ほどのプロデュース機能とよく似た考え方で、まちづくりラウンドテーブルというような呼び方をされております。

このラウンドテーブルというのは、プラットホームという呼び方をされたり、中間組織という、インターメディアトリーという呼び方をされたりします。プラットホームとは何かというと、電車のプラットホームです。降りる人と乗る人が顔を合わせますよね。そこで交流がありますよね。そういう意味です、プラットホームというのは、出会いがある場所という意味ですね。そういう出会いの場所を、ラウンドテーブルを作って、各種の市民とかNPOとか企業とか各種機関とか専門家が入って、そこでいろんな意思決定をしたり、まちづくりの活動の基本方針を、作ったりして行って、それを行政計画と連動しながら展開をしていきますという、ひょっとしたら、今日の提案をもう少し具体化していったら、こういう形へなっていくのかもしれませんが。この辺が非常に参考になるので、少しお持ちさせていただきました。

2.3 箕面市の山麓保全の仕組みの特徴

次は、もうひとつ、箕面ですけれども、これも4、5年通って、山ろく保全の仕組みみたいなものを、市民とともにどうやって作ったらいいのかというものを市と一緒に5年間ほどやりました。箕面市さんというのは、この手前にこういう市街地が発達して、その後ろにこの屏風みたいに北摂連峰があります。要するに、この山の持っている意味というのは、箕面という高級住宅地を支えている山ですね。イメージも支えていますし、環境も支えている山。これを守るのにどうしたらいいでしょうか。林業という仕組みでは、経済的に成立しません。あるいは、皆さんの心意気だけではできません。

どうしたら皆で守っていけるのでしょうかということを、市民さんと行政さんと入って、月一回、3年間ですね、毎月1回土曜日の午前中議論して、午後山歩きをするという風なことで、ずっと参画していたのですけれども、場所はこの部分ですね。ちょうど市街地がここまで広がっていて、この黄緑色に塗ってある部分です。ここの部分が一番市街地とく

つついているんですけども、この部分をどう、要するに皆で守っていけるか。

このときの考え方というのが、こういう考え方ですね。今までの協働というのはどういうことかという、行政に対して何かやってくださいとか、要求型ですね。これからは違いますよという話をしましてですね、みんな何らかの資源を持っていますと。知恵を持っている人がいます。あるいは、知識を持った人がいます。あるいは、知識はないけど、体力はあるという人もいます。あるいは、土地ぐらいちょっとぐらい、山貸したるでという人もいます。あるいは、お金を持った人がいて、自分は活動に参画できないけど、ちょっとした寄付行為ぐらいはできますよ。あるいは、技術を持った人がいます。計画技術を持っていたりとか、デザインの技術を持っていたり、絵を描くのが好きやねんとか、音楽するのが好きやねんという人もいます。お互いが皆、自分のできるものを出しあって、それで何ができるのですかという、これ、交流の場とかプラットフォームです。こういう考え方で守っていけないでしょうか。要求型じゃないんですね、ギブアンドテイクで自分も何かやる代わりに、そこで楽しみましょうというような話ですね。それと同時に、いろんな、周りにいっぱいいます。で、これを、仲人組織と呼んだんですね、交流の場を、いろんな要求のあるもの同士がお互いにお見合いして手をつなげば何とか出来上がるから、仲人組織という名前にしましょうか。これがプラットフォームですけども、こういう考え方を立案してですね、プラットフォームというのを作りました。ここでいろんな議論をして、次どんな行動ができますかという、議論の場だけではなくて、明日山に入って活動しましょうとか、どこかで木を集めてきましょうとか、苗木もらってきましょうとかいう行動の基点をこのプラットフォームで作るということを考えました。

ただプラットフォームを作っただけで、先ほども、総合プロデュース機能みたいなもの、誰が一体支えるのかと。市役所が支えるのかな、われわれが支えるのかなという話の時に、この場合にはそれを、要するに支援する NPO、このプラットフォームを支える NPO みたいな仲人組織を、皆で立ち上がるまで一度、継続してやってみましょうよというやり方をしたんですね。で、その結果、3年間お付き合いをして、申請するのに1年かかって、去年の夏にその NPO 法人が立ち上がって、このプラットフォームを維持するための、あるいはそれを運営するための仕組みができました。私、最初の1、2年は座長をしていたんですけど、だんだん座長を市民の人に代わってもらってですね、3回のうち1回を代わってもらい、2回のうち1回を代わってもらい、最後のほうはもう私は出ていなくていいと言われて、行かなくても済むようになっていくという風な形で、育っていく。このような形でこの NPO は育っていったわけですね。

それともうひとつは市の方で、今までずっと持っていた緑化基金みたいな、あるいは緑化保全基金みたいなものを少しそこから広域信託にファンドとして作って、で、このファンドを媒介にして、この NPO 法人が、プラットフォームを支える NPO 法人が、中間媒体をしながら、いろんな活動に補助できる仕組みを作って山を守っていきましょうという仕組みをつくる。もうひとつ、皆で議論してきたのは、どんな活動を補助しましょうとか、

いろんなことがあるんですね。里山の管理とか山の幸づくりとか、里山とのふれあいとか、山道の手入れとか。極端なことを言うと、山ろくの、モラルをどう向上させましょうかと、まあ、こんないろんな活動に極力受け皿としてのプラットフォームと、広域ファンドという仕組みの中で、参加型で守っていく。こんな仕組みを作りました。

そのときですね、これからの考え方で非常に大事な行動原則。目標をみんなで共有します。で、今までみたいに大きい話ではなくて、身の回りの規模でできることから進めましょう。大きい構想立てても進みません。もうひとつは、それぞれが主体となって無理せず、にちょっとずつ取り組んでいきましょう。で、ひとつずつの積み重ねを大事にしながら段階的に進めていきましょう。そうでないと、もう要するに、息切れしてしまうんですね。大きな構想を立てて、こんなことをしなければならぬと思ったら、財政はないし体力ももたないし、知恵も持たないという話になるので、できることから進めましょう、無理せず進めましょう、段階的に進めましょう。それと同時に、まず始めてみて、その過程で問題点を点検しながら、決めたことをなかなか変えられないというのが日本の文化なんですけれども、まずかったらどんどん修正していったらいいじゃないかと、それでだんだん理想に近づけていったらいいんじゃないかという行動原則でないと、成熟型のまちを作っていくのはなかなか難しいですね。計画倒れに終わってしまいますね。昔みたいにバブルの頃というのは、要するに計画作って、巨大な資金をポンとぶち込んだら出来上がったんですね。そうではない時代へきているので、こんな行動原則が大事ですね。こんなことでやってきました。これが、周辺の、置かれている状況ですね、成熟型な都市づくりの中で、こんなことが要するに置かれている状況ですという話です。

3. 成熟期を迎えた時代でのまちづくり

最後少し、まとめに入りますけれど、私自身、少し考えている話の中で言うと、環境、ちょっとだけ自分の専門の宣伝をします。真ん中にランドスケープという言葉が、景観という言葉があります。で、造園学というのは、ランドスケープアーキテクチャーと訳すんですね。アーキテクチャーというのは建築という意味です。風景を創造するという学問です。で、風景って一体なにかということなんですけれども、そこにどんな植物が生えていますか、あるいは、どんな気候のところですか、どんな地形のところですか、どんな土壌のところですか、どんな動物が住んでいますか。それと、どこに人間が関わってきていて、それが歴史の中で積み重ねられて、景観、今見ている風景というのができています。で、こんな風に風景、環境というとなかなか目で捉えられないんですね。目で見ている風景みたいなものを、要するにたとえば、目で見て、環境を捉えるということ、たとえば、景観という視点で見たらこうなりますよ。

ひとつだけ例をお話ししますね。大阪市の市役所のある大阪の平野というのは非常に緑が少ない。なぜでしょうか。これ非常にこれで説明するとですね、気候的には河内長野と同じように隆々と樹木が育つ気候です。同じ気候帯ですね。ところが、もともと大阪市内というのは、埋め立てでどんどん作った、船場なんていうのも全部そうですけれども、埋

め立てで作りましたから、土壌が悪いんですね。元々、万葉集なんかは葦原、葦という風景が詠まれていますよね。葦の風景なんですね。だから、樹木が育ちにくいから緑が少ないのは当たり前ですね。で、山もないんですね。地形を見ると、上町台地だけしか山がありません。だから、斜面の方が目に入ってきますよね。そういう意味で、緑が少ない。それで、自然だけで説明できますか。そうではないんですね。人間が、江戸期、近世から中世、中世から近世にかけて、商業の町でしたので、非常に細かい町割をして、早くから市街地ができたというのが大阪平野ですね。ですから、大きな公園を作る場所がなかった。環状線の中には大きな公園は、大阪城公園しかありません。あとは周辺の、要するに農地の部分に鶴見緑地作ったりとか、長居公園作ったりしている。人間の行為も、非常に今の風景に影響しています。で、こんな視点で環境を捉えてみたら、身近なところで環境を、理解できたり説明できたりしますね。こういう考え方をひとつとってくださいと。これは私の専門の話で、ひとつはね、宣伝です。

そういう視点で見ると、河内長野の、都市景観形成基本計画を作るときにもお手伝いさせてもらって、やっぱり河内長野をよく知りましょうと。どこに尾根が走っているんですか、で、どこに今、グリーンベルトみたいなものが残っているんですか、まあ、こんな地形に支えられて、われわれは生活している。で、こういうことをきっちり勉強しましょうね、あるいは知りましょうねと。これを大事にしましょうねと。もうひとつは歴史ですね。昭和7年時点であった集落って一体どこですか。このオレンジ色のところですね。この山間にも少しあります。あと、昭和42年のときにこういうところが出来上がっています。平成2年時点ではさらにこういうところまで。まず、平野部が埋まるんですね。昭和42年までに。その次に丘陵の頂部にこういう開発が入る。こういう歴史ですね。こういう、これは旧集落の歴史がたくさんあって、美しいところとか魅力的なところが残っています。こういうことを大事に、固有性などということをやっていきましょうね。そのときに考えた景観のタイプみたいな話ですね。こんな構造になっていますよ。やっぱり見る見られるの関係だとか、こういうここから眺めた時の頂上手前に緑があって、奥に緑があって、さらに奥に緑があるという風景、魅力ですよ、河内長野の。まあ、こういうことを勉強しましょうね。

あるいは、今まで都市というと、こういう道路形態だけで都市を考えていたんですけど、ここに川走っていますねとか、旧街道はどこに、西高野街道みたいなもの、どこに高野街道が通っていますか。あるいは、どこに緑のベルトみたいなものが残っていますかという、どちらかという生物の構造だとか、川の水の構造みたいなもの、こういうものを大事にしながら、柔らかなまちづくりを、あるいは、個性のあるまちづくりをやっていくことが必要じゃないですかというのがもうひとつです。

最後は、この、4、5、6だけお話しをします。こういう風な物理的な捉え方とか、目で見た捉え方とか、感性で捕らえた捉え方ですね、これを計画として展開していくときには、4つ、3つの視点をここに挙げています。

ひとつは、パートナーシップ型社会。これ、パブリックインボルブメントと呼ばれてみたりとか、参画型社会と呼んでみたりとかいろんなことがあります。で、地域経営の仕組みで、地域力をどう向上していったらいいんですかと。これ先ほど、八尾市の事例なんかで勉強したものです。で、先ほど書いていた話です、ここのは。

もうひとつは市民参画の仕組み、これはプラットホーム、あるいはラウンドテーブル、という風な形の中で、合意形成と行動の基点の仕組み。これ、合意形成だけではだめなのですね。一歩踏み出す、仕組みをどう作るんですか。

もうひとつは生きがい人口の増大。これはあの、住み続けたいまち。先ほど少子高齢化、恐るに足りずみたいな話をしたんですね。それはなぜかという、今まで、要するに、若いときには大阪市内に働きに行っていて、地域を振り返らなかった。なおかつ、地域で時間も使えなかった。高齢化が進行して、みなさんお元気です。で、そういうときになると、時間が獲得できません、という話の中で、そうしたら地域経営参画しながら生きがいができる人がたくさん、河内長野に住み続けたら、いいまちになるのではないかと。財政上もメリットあるはずだという風な話です。どんどん生めよ増やせよとか、あるいはどこから人口をとってこようという時代ではなくて、そこにやっぱり誇りを持って生きがいを持って住み続けたら、それが都市間競争に勝っていく魅力を、次の魅力を生み出すのではないかというような話が、生きがい人口の増大という風に。

あと、行動の原則、先ほども、できることから無理せずに行きましょうねという話をしました。それを、たとえば柔らかとかしなやかな計画とかデザインとか。やっぱり、柔軟性と持続性を持たないとだめですね。で、歩きながら考えるみたいなことが大事ですね。で、随時修正を加えるような考え方が大事ですね。

それをやっていくためには、評価の仕組みみたいなものがあって、よく、PDCA サイクルというような呼び方をします。いったん計画を立てます。これで20年間、後生大事に持つのではなくて、定期的に、その計画を実行はしますけれども、定期的に効果とか影響を計測します。計測した結果、間違っていたらもう一度見直しにいきましょうねという。Pというのはこれプランという意味なのですね。Dというのはドゥ、実行という意味です。Cというのはチェックですね。Aというのはアクションです。もう一度行動をして修正をかけていきましょう。多分、今回の総合計画なんかでも、この辺のモニタリングとか事業評価の重要性、あるいはこういうPDCAサイクルを確立していくようなことが、当然盛り込まれていくんだろうと思うんですけども、そういうことをすることによって、このしなやかな計画とか、柔軟な柔軟性と、持続性を持った計画として実行していけるのではないかなと。こんな話を、後のパネルディスカッションの前座という形で、ご説明をさせていただきました。5分ほどちょっと伸びましたけれど、これで私の話題提供みたいな話は終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

5 . パネルディスカッション「河内長野らしさを活かした元気なまちづくり」

コーディネーター

増田 昇：大阪府立大学大学院教授

パネリスト

金田 真一：河内長野市商工会青年部副部長

谷口 幸生：第4次総合計画まちづくり市民会議会長

西端 正彦：にぎわい河内長野 21 書記

森尾 陸子：河内長野市社会福祉協議会会長

橋上 義孝：河内長野市長

(敬称略)

増田：先ほどに引き続きまして、また出てきましたけど、よろしくお願ひします。さきほど、一番冒頭に、市長さんのあいさつにもございましたように、今日のフォーラムの大きな目的は、第4次総合計画に向かって、まちづくりを考えるきっかけを皆で探しましょうというのが大きな趣旨です。その中でも特に、河内長野らしさという風なこと、固有性とか個性とかいう話をしましたけれども、河内長野らしさを活かした、しかも元気なまちという風なことをこれから探っていきたいという風に思っています。先ほど、パネラーの方々のご紹介にございましたように、実際4人の方はすでに河内長野市内で非常に積極的な活動をされている方々です。そういう風な活動、実際行っている活動を通じてですね、いろんな、われわれ学ぶべき点もあるかと思ひますし、新たな課題も発見できるかと思ひます。4名の実践されている方々ですね、それに行政の責任をもたれている市長さんを交えて、これから4時ぐらいまで、そのきっかけづくりについてですね、議論をし、先ほど言ひました行動の起点が少しでも見つかればという風に思ひますので、ご清聴のほどよろしくお願ひしたいと思ひます。それと途中で一度、会場からも2、3、時間の関係がありますので、たくさんとれないかもしれませんが、2、3ご意見をいただきたいと思ひますので、ご協力のほどよろしくお願ひしたいと思ひます。それで



は、早速、さきほど、第4次総合計画まちづくり市民会議さんの方から、提言をいただきましたけれども、まだ少しですね、補足事項がございましたら、少し谷口さ

んのほうから補足なり、今後に向けてなり、いただければと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

谷口：はい、先ほど、駆け足での報告でしたのでわかりにくい点があったかもしれませんが、ちょっと補足しながら、らしさを活かした元気なまちづくりについて考えてみたいと思ひます。この17名のメンバーといひますのは、非常に長年、地域の環境改善だとかあるいはまた、青少年の育成とか、あるいは福祉分野ですね、民生委員をやられた方とか、市政モニターに参加されたとか、こういう方が多かったわけで、私なんかは4、5年前から地域に目を向けだしたという立場ですので、大先輩に代わってこういう所で、お話しさせていただくのは非常に僭越なわけ



ですけれども、私なりに感じたことを話していきたくと思ひます。私自身4、5年前はこういった形で、お話しするような立場に立つとは全然思っでなかつたんですね。河内長野に住みだして22年になるんですけども、まあ、あまり良くないといひますか、イメージ的には、河内長野を捉えきれないなあと、市外なんかの人から聞くのにはですね、感じていました。といひますのは、「谷口さん、河内長野？」ということですね、あまりこの河内長野のイメージ、非常に中山間地の山奥の場所とか、あるいは、「河内弁の発祥のところ？」とか、あまりよくないイメージで、「谷口さん、いいところに住んでいるんやね」と言われたことがないんですね。で、それが非常に残念な気持ちとともに、シニアライフが近づいてきた中で、果たして河内長野で、生きがいのある生活ができるのかな？と、そこまで考えて、いろいろ他の都市も、見たりしていたんですね。

しかしある時ですね、4、5年前になりますけど、大阪市内の人、「谷口さん、河内長野？いいとこに住んでいるじゃないの」ということで、たとえば、長野駅前の自然公園ですね、長野公園、あるいはまた、「駅前の大きな木、知っている？」とか、そして「長野神社の巨木も知ってる？あそこ由緒あるところよ」。でまた、「天野酒の蔵通りからずっと烏帽子形へ行く高野街道、そんなとこ知ってるの？」と。でずっと最後は、流谷八幡ですか、あちらの大銀杏を見たらほんとに、風雪に耐えた根を張っているあの銀杏を見て、生きる勇気もらったよ、と。で時々、グループで行っているんだよ、ということ、まあ、社会教育課の尾谷さん並みの解説を聞かせてもらったということなんですね。

私自身は、朝早く出て夜帰ってくるというような生活の中で、河内長野をほとん

ど知らないんですよ。ですからまあ、そういった面から「へー、河内長野って案外いいところあるんやな」。まあ、長野神社でしたら、昔そうだ、七五三で行ったなとか、あるいは烏帽子形やったら、なんかプール、子供連れていったなとか、それぐらいしか、思い出がないわけですね。観心寺とか金剛寺のお寺なんかはたいしたもんやよということで、「へー、そんなもんかな」ということで、河内長野も見直そうというようなことからまあ、地域に目を向けて活動した中で、確かに、おっしゃるような形ですね、この豊かな自然、またこの歴史の舞台となった多くのところ、史跡ですね。そして、先生のお話にもあったパノラマ景観といえますかね、住宅から見た景観、そして、また、玄関口ですね、千代田、長野、そして三日市、それぞれ特徴を持った、都市、都市核と言うんですか、それから、その渡り廊下にあたる丘陵地ですね。非常にこう、緑も多いですし、いわゆるパノラマ的な、景観。そして奥座敷的な、ちょっと神秘的な山々の、あるいはまた湖といえますかダム、そのへんの景観。滝畑資料館も、2、3年前に行ったのが初めてです。あそこで見て、本当にすばらしいなあと。そして住宅保存されている、そういったものもありますし、河内長野ってものすごく魅力のある街なんやなあ、と見れば見るほど実感を得てきているんですね。市民農園的な、そういった休耕地を活かした、一つの制度もありますし、また、いろんな形で、取り組んでいける舞台、そういったものがあるなという感じがしたんです。

今回の市民会議の活動で、いろいろ教えてもらったこともあるんですけども、その一環として、元気なまちってどんなかなと考えた場合、まず元気そうに見えるということが大切じゃないかなと思ったんです。で、参考になるひとつの、三島市という静岡県の街、グラウンドワーク三島って有名になりましたけど、まあ、10年以上かかって源兵衛川のその清流を取り戻すという運動から、今は大きなまちづくり組織になっているというところを観にいて、街中ずっと見ましたけれども、「河内長野の方がいろんな、変化に富むし、むしろ、河内長野でやったら、元気になるまちづくりができるんかな」、そういう風にも実感したんですね。ただ、ちょっと、印象に残ったのは、その、源兵衛川と反対にある桜川というところですね、そちらの方も遊歩道を作ってますね、浅い川ですので、アヒルの住処みたいな、そんなものを作っていて、そこで立ち止まって見ていたら、知らない間に40半ばぐらいの女性がみえて、「これどなたが作ったんですか?」と聞いたら、「私です」と言ってね、「よくぞ聞いてくれました」という形でね。「私の家の前ちょっと来てください。きれいに花を生けていますので、それを見てください」と。最後にこんなちょっとピーズ玉みたいな、キーホルダーみたいな、「これを私作ったのです。お土産にどうぞ」と、いうことでね。こういうものをもらって帰ったんですね。そういった、非常に、もてなしの心といえますかね、誇りを持って、まちづくりをしていると。一般の人が。そういうのを実感したわけです。河内長野も非常にこう、

多くのグループが活動していますし、また、女性が特にいろんな形で活躍されていますのでね、まあ、これから、シニアを迎えるわれわれ世代も、がんばってまちづくりに取り組んでいきたいなと、こういう風に感じております。

増田：はい、ありがとうございます。多分、われわれの世代は、駆け足で人生を送ってきて、足元を見る時間がなかったわけですね。ところが、足元を見てみると、いろんな魅力あるものがたくさんあるというのが、きっかけだと、非常に、示唆に富む補足をいただきましてありがとうございます。もうひとつはやっぱり、もてなしみたいな話ですね。これはやっぱり、ものすごく大事だと思います。もてなしの心をどう持てるのかと。これはあの、環境づくりでもそうですし、ひとつづくりでもそうですね。ありがとうございます。そしたらあの、引き続きまして、次には、実際に、新商品の開発とか、あるいは、いろんな組合の連携による産業祭みたいなことをされている金田さんからお話を伺いたいと思います。よろしくをお願いします。

金田：商工会青年部の金田といいます。よろしくをお願いします。まず私たち河内長野市商工会青年部は、商工会に所属する40歳以下の経営者もしくはその後継者で構成され、現在、40名弱の部員で活動しています。全国の商工会には青年部がありまして、その理念として、創造力と行動力を活かし、地域振興発展の先駆者となる、そういうことを掲げています。そんな中、先ほど先生のほうから紹介いただいたように、私たち河内長野市商工会青年部の主な活動といたしまして、河内長野市内の全産業を大いにアピールする、そういった目的で、市内の全産業、農業の河内長野市農事実行組合連合会、林業の大阪府森林組合南河内支店、観光の河内長野市観光協会、私ども商工の河内長野市商工会、以上4団体で主催する「河内長野市産業祭 ふれあい楽市きらく市」の企画、運営を行っております。それとまた、河内長野市内の、先ほども出ていたような、特産品ですね、そういったものを開発したいということで、河内長野市の川上地区のフキを地酒である天野酒さんの酒かすで漬けた「ふきやん」の開発、販売を行っています。以上が、今現在行っている主な活動内容になります。



増田：はい、ありがとうございます。どうでしょう、いろんな産業をつなげるというのは、何かご苦労がございますか。

金田：そうですね、やっぱり、各団体さん、その下にもいろんなそれぞれの団体さんがありますし、たとえば商工会ひとつにとっても、みなさん経営者ですとか、そういった方々ですから、やはりその話を全部まとめるというのは、いろんな方々から意見を聞くというのはいいと思うんですけど、やはり、コーディネートするのは難しいかなということを思いますね。

増田：多分、先ほども私ちょっと、ハイブリッドみたいなものが何でも使われてくるようになっていきますねと、今まで純粋なものが良かったけど、交ぜ合わすみたいな議論があるねという話をしたんですけど、本当に、いろんな産業をつなぎ合わせることで、新たな産業が生まれたり、新たな商品が生み出されたりすることは、非常に勉強になりますよね。ただ、難しいのは、長年の伝統の中でずっと縦系が続いていますから、それを横系でつなげるご苦労というのが、多分、金田さんの今話にもありましたけれども、これは、われわれこれから取り組んでいかなあかん、横系をどうやってつむぎ合わせましょうかみたいなものが、これからの議論の中からも出てくればと思いますので、あとで、横系の話もしていただきたいと思います。ありがとうございました。引き続きまして、西端さんの方から、河内長野市の駅前を中心に活動をされているということで、よろしくお願ひしたいと思います。

西端：はい、今日は、市の商工会連合会という立場ではなく、にぎわい21ということで、意見を述べさせていただきます。まあ、にぎわい21という名称自体が、まだなかなか、ご存知でない方が多くあると思うんですけど、簡単に言いますと、もっと河内長野の駅前に、にぎわいを取り戻そうよという狙いから、名称が「にぎわい21」という風になっております。平成10年の6月に、中心市街地活性化法というものができまして、全国的にまちの中心地に空洞化が目立ってきているよと、それを何とかしないといかんよ、もう一度活性化を試みなければいけないよという風なことが、狙いでできた法律なんですけど、河内長野ももちろんそのとおりで、ハード面はすごく立派に、平成元年をオープンに素晴らしい玄関口ができたんですけども、なんとなく商圈等もやや郊外化になってきまして、本来の駅前のにぎわいというのは、薄れているというところがやはり目に付きます。逆に言いますと、駅前の果たす役割というのも、もう一度見



直さなければいけないなあ、ということで、できた会なんです。実際にできたのは一昨年、平成 14 年の 7 月に設立したのですが、それまでの間に、他市の見学であったり、フォーラムを開催したりということで、自分たちの勉強をしてまいりました。自分たちというメンバーはだれかといいますと、駅前の商店街の店主であったり、近隣の会社の経営の方であったり、まちに古くから住んでおられる方、一方、学識経験のおありの方、行政の方々の指導をいただきながら、なんとなくよちよち歩きをしてきたと、いうことでございます。

ではわれわれに何ができるのかということなんですけど、したいことはたくさんあるんですよ。でも、なかなか、どこから、手をつけていこうかというところで、いろいろ考えたところ、やはり河内長野市というのはですね、ご存知のとおり、歴史・文化、またこう緑、自然環境といろいろ特徴、また固有の財産がたくさんあるわけです。中でも、国宝級そして重要文化財級というのは、随分河内長野市は保有しております、他の府・県の保有数に値するほど、一つの市で持っているという特徴もございます。そんなところをなんとか活かそうということで、河内長野に、お越しになれる市外の方々、そしてまた、新しく河内長野市にお住まいを移られた方、まだまだ河内長野市の良さや特徴をご存じないと思うんです。そういう方々に、まず、われわれも勉強しながら、いいところを持って帰ってもらおうということで、ひとつは観光ボランティアといいまして、ボランティアで各施設や社寺仏閣という観光地を、われわれの会の、内輪の人間が、お越しになられた方をご案内してさしあげようというところに、目をつけました。統計表によりますと、河内長野市の中の観光地とか施設をご利用になれる方々が、年間 60 万人ほどおられるということなのですね。当然、市内の方もおられますし、遠くから来られる方もおられる。今まででしたら、当然目的地へお越しになったら、その辺を散策されてそのまま帰られる。たとえば、金剛山に登ったと。河内長野の駅で降りて、バスで金剛登山口に行って、登って帰ってきて、電車ですぐ帰るというパターンがほとんどだったと思うんですね。車にしても通過点であったかもわかりません。その辺の方々に何とかこう、もうちょっと河内長野の駅前で滞留をしていただくというところが狙いでございます。15 年の 7 月ごろから、この観光ボランティアの方々を募集しまして、予想をはるかに上回る 100 人以上の応募の方々が来られたということでございます。その方々自身に河内長野市内の観光地の勉強をなさっていただいて、習得された知識をよそから来られる方々に、ボランティアでガイド役を務めていただく、という動きをしてまいりました。

幸い昨年からは河内長野市と南海電鉄と共催ですね、まあ、南海電鉄自体もあちらこちらでやられているんですけども、沿線の有名な観光地や訪れるところの多い市と組んでですね、ハイキングみたいなものを募集されて、という風な企画なんですけれども、それも、昨年からは河内長野市と共催で 4 回ほどされている。回を重ね

るほど、参加者が多くなってきているということで、先月の4月の24日にされた分については、450名くらい。初回は300名ほど、2回目は200名ほど、次は300名ほど、前回については450名ほどの参加があったという風に聞いております。その方々のアンケートの中でですね、60%は市外の方々なんですね。やはり、市外の方々から河内長野に来られる方が多い、それだけの魅力もあるかと思えます。観光地的な要素というのも充分あるんですけど、市の河内長野の駅前での滞留時間を多くするという事は、やはりそれなりの河内長野の駅前の魅力をわれわれも作っていかねばならないということで、非常に難しい部分もあるんですけども、そういう思いを持つ人をまず増やしていこうということで、随時会員募集をしているんですけども、なかなか、人の集まりというのは難しいものがございます。ですから、先ほども谷口さんからもお話があったように、訪れられた方々に、たとえば河内長野の人が観光のボランティアで接する折に、温かいもてなしをするという心がけがもしあれば訪れた方は「河内長野っちゃんのはいいな」と思う以上にですね、このボランティアの方は河内長野を愛しておられるんだなということが、やっぱりお分かりいただけると思うんですね。それがまた、まちの魅力になったり、リピーターになっていただいたり、本当に、地道な活動なんですけども、徐々に成果を上げていくんじゃないかなと思います。

いろいろすることがあるんですが、もうひとつだけ、河内長野の駅前の界隈を滞留していただくもののポイントの一つとしまして、駅前の商店街の方もやはり、他市と同じように空き店舗が増えてきておりまして、その空き店舗を借り上げ、利用して、そこで、訪れました人々に立ち寄っていただけましたら、面白いものがあるんじゃないかという探りをしております。たまたま、長野商店街では空き店舗一軒を利用しまして、にぎわい工房という名前で営業しています。営業っていても、利益を追求するところまではまだいかないんですけども、出店者を募集しまして、店舗は7、8坪しかないんですけど、その中でひとつは2坪ぐらいの店、それは河内長野の当然、特産物をごらんいただこうと、まあ、買って帰ってもらおうということで、お味噌や爪楊枝やお酒や天野酒を利用したゼリーやケーキなどを極力並べてですね、見ていただこう、買っていただこうと、もうひとつは、チャレンジボックスと言いまして、自分で作った民芸品や工作などを、45点近くのマスの箱をズラーっと並べまして、ご自分でそこで商品を展示していただこうと。気に入った方は買っていただこう、そのうちの売り上げの数%だけ、場代として、このにぎわい工房がいただこうということで、空き店舗の活用等も利用しています。2階は、貸し部屋みたいな形ですね、英会話教室であったり着付け教室であったり、子供の子育て教室であったりということで、非常に安いお値段で、地域の方々にご利用していただこうということでいろいろやっております。将来的には、まちの情報の発信基地になって、多くの方々にどんどんアピールをしていける拠点になればいいなとい

うことで、ポチポチやっております。以上でございます。

増田：はい、ありがとうございます。市民会議の方からも「歩くまち」みたいな話がありましたよね。何か推奨するルートみたいなものを作ってみましょうかということでは会議では出なかったでしょうか。谷口さんいかがでしょうか。

谷口：はい、アイデア段階の提案というような、さきほどの方向でも 30 以上の、特に第 1 グループ、観光とか産業がらみで出ています。南海のほうでもいろんな、パンフレットとか用意していますし、そういった面では、ヤング向けとシニア向けというような形で、いろんな人が参加できるようなコースを作ったらどうかという意見も出ています。

増田：なるほど、ありがとうございます。あと、金田さんいかがでしょう、先ほどのあの一、市民会議の方の話の中でも、名物と食事処みたいなものがあんまりありませんねという話があったんですけど、西畑さんのにぎわいをしようかと思ったら、そんなことも必要なわけですよ。ひとはふきやんみたいな、まだ他に商品企画はたくさんありますか？

金田：いえ、ふきやんひとつにしても、誕生までに、そこまで行くまでかなり先輩方が試行錯誤されて作ってきたもので、まあ、いろいろ考えていってみなさんのアイデアを持っていきたいんですけど、そこに行くのにも大分かかったということと、あと、それを大きくしていくのも、今はその川上地区さんの方でやっていただいているんですけど、それをもっと大きくしていくには、どうすればいいのか、その辺の問題点とかもいっぱいあるので、だから、小さい芽というのは、他の団体さんもそうですけれど、いっぱいあると思うんですね。ただ、それをどう育てていって、みなさんにアピールできるかというのが難しいのかなと思います。

増田：なるほど、わかりました。後でみんなで考えましょうね。あと、チャレンジボックスでは、NPO などの炭焼きしているとか、山との関わりの中でチャレンジボックスされているようなのはどうでしょうか。

西端：まあ、河内長野の場合は、まだこのにぎわい工房ではそういう例はないんですけども、個人の方々が作品を作ったとか、手芸品を作ったとかということで、結構利用いただいております。

増田：そうですか、ありがとうございます。では、森尾さん、お待たせいたしました。

大変な、会議の会長を5年間もされているということで、そのご苦労も、あるいは社会福祉って一体何かという話も含めてですね、お話をいただければと思います。よろしく申し上げます。

森尾：私は立場上、福祉に重点を置いて、この際、社会福祉協議会の仕組みとか事業などについて、簡単にご説明したいと思っております。社会福祉協議会と申しますのは、住民一人一人の福祉ニーズや課題を、地域全体の問題として提供し、保健・医療・教育等の関係者や、専門機関、団体などと協力して解決を図ろうとする、公共性、公益性の高い民間非営利団体であります。法的には、社



会福祉法第109条に基づき、設立されたものであります。河内長野市社協は創設されました昭和30年から、一貫して住民の福祉活動への参加を進め、地域福祉活動の推進に力を注いでまいりました。民間組織としての自主性と、住民に支えられえた公共性という二つの側面を併せ持っております。

平成12年4月に施行されました社会福祉法では、地域福祉の推進を図ることを目的とする団体として、法的にも役割が明確化されました。市社協の仕組みにつきましては、特に活動の担い手と受け手の双方の意見が反映されますように考えられています。法人運営経営の執行責任を持つ機関としての理事会、諮問機関としての評議委員会を中心に、事業を展開しています。財源につきましては、主として、国、府、市からの補助金、助成金、業務を受けることによる受託金、事業収入、共同募金の配分金や、会費収入、他に市民から寄せられる賛助金や寄付金などが貴重な財源となっています。ちなみに、当社協の平成16年度当初予算は約7億6千万円となっています。当協議会は障害者センターあかみねや福祉センター錦溪園の2つの施設や、ホームヘルプサービスの受託事業、また、老人クラブ、民生委員、児童委員など、12団体の事務局など、行政からの事業が多いわけですが、その後、介護保険事業への参入、福祉委員会を中心とした小地域ネットワーク活動の推進など、地域福祉活動推進の中心的役割を担っております。

現在、当社協の中心的地域福祉活動として、市内の全小学校区に福祉委員会が設立されています。これは、協力員を含めると、約1千人の社協の大応援団であります。組織の構成はあくまで住民の皆さんが主体であり、自治会をはじめ、民生委員、児童委員をはじめ、各種団体の役員が参画され、1地区約50名から80名程度の役員構成となっています。一昨年には、委員長連絡会も発足し、ますます活動は

活発になるものと期待しています。援助活動としての小地域ネットワーク活動は、保健・医療・福祉の関係者と住民が協働して、一人暮らしの高齢者の見守りなどを続けています。次に、ボランティア活動の場としましては、ボランティアセンターを設けており、相談窓口も開いています。市立福祉センター錦溪園と障害者福祉センターあかみねの管理運営は、市より受託しております。そのほか、相談事業として、大阪府生活福祉基金の貸付事業、民生委員による心配事相談、福祉機器貸し出し事業、地域福祉権利擁護事業と成人後見者制度、さらに、全国的業務として、赤い羽根共同募金活動などがあります。終わりに、ホームヘルプサービスにつきましては、昭和44年に、市からの受託事業として開始され、高齢者に対するヘルパーサービスをはじめとして、障害者ホームヘルプサービス、ガイドヘルプサービスと続き、介護保険制度施行まで、30年以上の歴史と伝統があります。介護保険制度下での当社協の訪問介護は市内において、シェア34%を維持する最大の事業所であり、サービスの質を向上させ、利用者に満足していただけるサービスを提供する唯一の事業所であると、自負いたしております。14年度からは、精神障害者に対するホームヘルプサービスが開始されました。これらの制度に対応でき、かつ、高度の技術と能力を有したヘルパーを確保し、質の高いサービスを提供できる事業者は、もう一度申し上げます、今のところ当社協以外にはありません。

これからの社協は、新たな時代潮流に対応するため、地域福祉活動計画の策定を推進しております。すでに、各地域において、福祉を語る懇談会を開き、大勢の参加をいただきました。今後、社協の経営、業務執行体制、財源構造、組織体制など、基盤強化を進めているところであります。以上です。

増田：はい、ありがとうございます。非常に、社会福祉というのは、われわれの基礎体力、あるいは基本的な事項といってもいいのかもしれないのですけれども、なかなか、全体像がわからないということで、会長さんのほうから、全体像をご説明いただきました。特に、地域が基本になっているということですね。これは、まちを考えていく中で、非常に大事な視点だと思いますので、その点につきましても、後ほど議論したいと思います。ありがとうございました。最後になりましたけれど、市長さんのほうから、話題提供といえますか、河内長野市さんでもすでに協働の仕組みみたいなものが、具体的に動いていようかと思います。そんな話題もいただけるのではないかと思います。よろしくお願いします。

市長：ただいま、先生がおっしゃられましたように、市民と協働のまちづくり。そのためにはまず、行政と市民との信頼関係、これが私、一番大事ではないかと考えております。一生懸命、協働協働と言っていますが、まず、そこが出发点なんじゃないかなと。そういうことで、行政も市民と本当に信頼関係、お互いの信頼関係をま

ず作る。そして、情報をどんどん提供していく。今は情報公開はやっていきますけど、行政の持っている情報を、これは市民の財産でございますから、情報をどんどん提供して行って、よく行政の中のことを知っていただく。それでこそ、初めて、信頼関係もできてくるのではないかと思います。そういうひとつの基本的な観念、観点からですね、今おっしゃられました、協働に対してどのような取組みを、市民との協働に出して取り組んでいるのかということでございますけれども、今までのように何でもかんでも行政というのでは、これからの時代には、本当のいいまちはできなくなる



のではないかと、やはり、もう一度、市民との協働、つまり市民との協力関係がなくては、とてもできないということで、今まあ、盛んにそういう芽がどんどん、ありがたいことに市民の中から出てきております。そういった中でですね、まず、アドプトロードという言葉をよく皆さんお耳にすると思うんですけども、アドプトロードというのはですね、難しい言葉で、私も、はじめは何かなと思いましたが、養子縁組ということでございまして、これこそそういう風にお互いの協力をしあうという意味だろうと思うんですけど、このアドプトロードですね、今、現在、幹線道路、外環状線でまずやっていただいておりますのは、野作とモリ工業と石仏、この3地区でやっていただいております。これはどういうことかといいますと、道路をきれいにしようということです。心無い人がポイ捨てなんかで、よく捨てられるけども、もう相当のごみが出ています。やっぱり、まちはきれいにしていこうということですね。そのまちへ行って、ほんとにこのまちはいいなあ、活気があるなあ、いいまちだなあというのはやっぱりきれいなまちですね。だから、それを自主的に地元でやっていただいている、清掃をやっていただいているということでございます。それから市と、協定を結んでやっていただいているのは、貴望ヶ丘と天見地区で、私も協定書のとき、参りまして、本当にもう、感謝しているわけですけども、本当に自主的にやっていただいている箇所がそれだけあるわけでございます。

それとあわせて、今、私は公約で申し上げましたように、東西南北にコミュニティセンターを作ろうということで、日野に作りましたみのでホール、これは、日野の第2焼却場の関連施設でございまして、みのでホールを作りまして、小山田にはあやたホールを作りまして。そして、清見台にはくすのかホール、これを作りしました。その公共施設は全部、地元で管理してもらおう。そして、役所が厳しい使用規定なんかを、作って窮屈な使い方をしていただくのではなく、ある程度自由に、地元で親しんでいただけるような施設利用をしていただこうということで、地元管理を

していただいております。それとやはり財政的にも今、厳しい時代ですから、ある程度助けていただくということにもなるわけございまして、そういった一挙両得といたしますか、そういうことつながればということで、やっていただいているわけです。これから南北も作っていく中で、いろんな公共施設を、今は財政が厳しい中で委託などをどんどん進めていく中ですから、地元管理をそういう風にしていただいているということですね。

それと、ボランティア活動への支援ですが、欧米では、もうほとんどボランティアですね。まちづくりには本当にほとんどボランティア。ぱっと駅を降りて、そのまちの駅に降りまして、このまちは本当に活気があるな、このまちは本当にいいまちだなと思って聞いてみると、やっぱりボランティアが盛んなまちですね。だからやっぱり、ボランティアに対して最近、ボランティアはしたいけど、どうしたらいいのかとか、まあ、いろいろの言葉をいただくわけで、だから、ボランティアセンターというか、ボランティアの拠点を、何とかして作っていきたい、と思っておるんですね。だから、そんな中で、推進委員会の設立をしていただいておりますし、ボランティアフェスティバルの開催をしていただいております。そして、活動紹介冊子の作成をしております。

そういうような今、ボランティアに関する仕組みで、今、策定中のものについては、公益活動支援とか、協働促進懇談会とかがあります。ただ、役所があまり、いろんなものを作っても、ほこりをかぶってしぼんでしまうようなことでは何にもなりません。実際これ実行が大事でしょうね。だから、本当に実行のできる、策定計画を策定していきたい。もう、これからは本当にそういう時代ですよ。後から、ちょっと私も話を申し上げたいと思うんですけども、やはりこれから地方分権が進んでくる中でね、地方でできることは地方でという方向で行く。そのことにつきましては、あとでまたお話申し上げたいと思います。

増田：はい、わかりました。だいぶもう、協働のまちづくりそのものが進みつつあるというようなお話ですね。ひとつだけ、よく誤解があったりするので、私なりの話でいうと、よく、行政と市民と共生とか、自然と人間の共生と言って、「共生」というものもよく出てきますよね、このごろ。で、「共生」とっていったい何だろうか、と考えた時に、このごろ、シングルパラサイトという、独身で親からずっと離れずに食らい付いているようなのをシングルパラサイトって言うんですね。パラサイ



トって寄生という意味なんですね。共生も寄生の、寄生も共生の一形態なんですね。いろんな関係の共生形態があります。で、市民と行政との共生とか、企業と市民と、行政の共生という話になると、お互いがお互いを求め合うというような、お互いがお互いがいないと成立しないというような関係性、これが一番高次の共生ですね。そんな形を目指していただければなあというのを思いますね。これが、下手にパラサイトみたいになっちゃうと、大変だというような話があって、これは蛇足ですけども、そんなことでございます。ありがとうございます。一応、一巡、もうすでに行動の第一歩が踏み出されていますよというのを、市長さんも含めて、話題提供いただきました。いかがでしょう、あの、会場の方からも、たとえば、時間があんまりありませんけれども、簡潔に、もうこんな芽生えが市内各所にありますよとか、こんな協働の行動を考えてみてはどうですか、みたいなご提案なりですね、こんなことも進んでいますよという情報提供なり、ございましたらいかがでしょう？ だれかいらっしゃいますでしょうか。あるいは、こんなこと、ちょっと協働の関係で考えてみたらという話題提供でもいいのですけど、いかがでしょうか？ もうずっと、聞きまわるばかりの立場ではお疲れかもしれませんので、少しご意見いただける時間でもありますので、いかがでしょう？ だれかいらっしゃいましたら、どうでしょうか。よろしいでしょうか。少し前で進めていってよろしいでしょうか？

観客：じゃあ、ひとつ伺います。

どうもすみません。私、河合寺のムカイと申す者で、あの、こういうフォーラムに参加させていただくのは初めてでございます。たまたま2、3日前に通知が来たもんですから、あれ、こんなことやってはるの？ と思って今日は聞かせていただこうと思ってまいったんですが、よりよりお話を聞かせていただきまして、先ほどから増田先生と、まあ、パネリストのお話をお伺いいたしまして、聞いとるうちに、それぞれのことについては、私何も疑問も何も思いません。ひとつだけ、前から言われておることで、広域行政というんですか、都市合併の話ですね、それとはこれはどんな具合に結びつくものであるのか、というようなことをちょっとお聞かせ願えればありがたいなあと思うんです。もちろん、広域行政が行われたとしても、こういう考え方はそれぞれ必要であろうということは、よくわかるんですけども、むしろ、そっちの方の前提が、こうなっているんだというようなことをお示しいただけるならば、この話もまた具体性を帯びていくにちがいないと、そう思ったもんですから、ちょっとこの失礼でございますけれども、お伺いしたいと思います。どうもすみません。

増田：わかりました、ありがとうございます。市長さんいかがでしょうか。今、広域行

政については、どんな立場をおとりなのかというのはいかがでしょうか。

市長：ただいまご質問いただきまして、今、合併問題が各自治体、全国的にいろいろ進められておるところでございます。合併特例法は、17年、平成17年という一定の期限を持っておるわけでございますが、なかなか思うように、国の思うようには進まないというのが現状でございます。私が、考えておりますのは、広域合併よりもむしろ、広域行政は大いに進めるべきであると。しかし、国の言われている合併というのは、財政が非常に厳しいから、やろうというもので、お金の面だけの合併では、ちょっと、納得のいきにくい進め方をしている。これは強制にきているわけではないんです、国は。自主的にということを盛んに言っています。そのまちはそのまちの文化があり、いろんな歴史も、あるわけです。だから、そういうまちづくりの観点から合併を考えていくべきで、お金だけで考えるのは、ちょっと疑問があるのではないかなと。私はむしろ、タイム、期限を17年とって、期限を切ってしまうのではないと思いますね、そういうまちづくりの観点から考えていけば。これはね、財政上逼迫してどうにもならん、これ以上景気がどんどん悪くなる。まだまだ、財政が厳しくなるというのなら、もうそれはある程度は合併の必要性も出てくるでしょうけど、精一杯いっぺん努力をしよう、もっと行財政改革を徹底的にやると。そして努力をして、やっぱり、自分たちのまちは自立していく経営をしていこうと、自立した都市経営をしていこうと、私はこういうことが大事であって、すぐに合併に逃げ込んでしまうと、何も、まちの文化も何も捨てて逃げ込んでしまうというのではなく、努力はしていこうということです。

そして、もうひとつ考えますのは、これは極端に言うんですけど、国の国会議員なんかを前において言います。合併というのはひとつの結婚、われわれの生活では結婚ですよ、結ばれるわけですよ。だから、国がね、財政が今もう逼迫してきて、国の財政のつけを市町村に回してきているのではないかと、政略結婚ではないのかと、こう言うのです。だから、あの、私はやるだけのこと、そりゃ合併は否定しません。私は、反対はしませんけれども、最大限まちの文化を大事に、自立経営をしていけるまちに、何とかいっぺん努力しようという方向でいって、合併するのならね、1万人以下の町村がすればいいですよ。交付税でほとんど賄っている町村、これはもう90%まで国の交付金で都市経営している。しかし、10万人以上の長野市で言えばですね、税金はもう60%、70%、税金でやれるんですから。町村で1万人ぐらいの人口のところって多いですよ。もう、3200、3300ある中で、600ぐらいですよ、市は。あとはみな町村です、小さい。こんなところは、すぐしてもいいと思います、私は。だからそういう考えでございます。おわかりいただけましたでしょうか？

観客：市長さんのおっしゃっておられることはよくわかりました。話の中身もそれで充分結構やと思います。が、そういうことが、みなさんに情報提供されてないんじゃないか、そっちの方が問題ではないかとそう思います。

増田：はい、どうもありがとうございました。質問も非常に的確でしたし、お答えいただいた市長さんも熱意を持って答えていただいたということだと思います。ひとつだけ専門の立場から言うと、自立というのはさきほどあの、自己完結みたいな「立つ」という自立と、リズムみたいな「律」が両方とありますよという話をしました。で、自立というのは、自己完結でも、要するに鎖国生活みたいにですね、閉じこもってしまうと言う意味ではないんですね。で、やっぱり、自立ともう一方でいるのは連携なんですね。そういう意味で、お互いに個性を持ちながらとか自立をしながら、都市間で連携をしたり、ひょっとしたら姉妹都市のカーメルとも、こう連携しているとかそういう意味の連携というのは、これから大いに必要になってくるだろうと思うんですね。ヨーロッパなんかでも、国を超えて都市間で連携するような話が出てきています。これは、都市間競争でもあるわけですし、やっぱり、あの、鎖国ではなくて、自立ちゅうのはですね、鎖国と連携これ両輪だというふうに、これ学問的には言えると思います。ほかいかがでしょう、もう一人ぐらいいかがでしょう。よろしいでしょうか。あまり押し付けてもなんです。4時が目途になって、だいぶ時間も過ぎてきています。さきほど、市長さんから少し、大きな視点でこれから協働をやっていく場合に、いかに人と人、あるいは、市民と市民、あるいは市民と行政、いかに信頼関係を築くかが基本だと。そういうことも踏まえながら、今後、どういう活動なり、どういうことを自らがやっていくか、あるいはその中で信頼関係をどう築いていったらいいかということも含めてですね、最後にちょっと一巡で申し訳ないんですけども、谷口さんのほうから、順次ですね、今後に向けてという形ですね、ご意見いただければ。

谷口：はい、市民会議に限りませんけれども、ひとつのグループなり、ある程度の組織になったところで、合意形成をどうするかというのが大きな課題になってくると思うんです。市民会議の方も、あり方、生き方、やり方というような、それぞれ理念・方針・施策、この辺で、足並みがそろえば、非常にわかりやすくなったと思うんですけども、限られた6ヶ月間という時間ですし、メンバー的にも、もう少しいろんな分野の人がおられれば、そういう形も進んだかもしれないんですが、とりあえず、そのやり方まで合意形成をどのように図っていくかという課題が残っていると思います。もうひとつはその取り組み方ですけども、この総合計画となりますと、長期の期間になるかと思いますが、感覚的にはまちづくり三段跳びというような発想で、今年来年がまあ、助走期間ですね、そして18年から本格的なホップステ

ップジャンプという形で、総合計画に沿った形で、市民レベルで取り組めるところは取り組んでいく。そのためには、いろんなアイデア段階ですけれども、提案的な形で出ていますので、それを基にとにかくやってみる。個人レベルじゃないですけれども、多少有志で、そして、小さな成功事例を作っていく。そういった中で、やればできるんだとか、そういう形で輪と輪を広げていく。そういう方向で、市民会議以外のメンバーの方にも呼びかけながら、できるところから取り組んでいきたい。やはりまちづくりとなったら非常にこう、何か大きなことに取り組むというような感覚ですけれども、つきつめていけば、自分づくりということが言えると思うんです。ですから、自分のできるところから取り組んでいくという感覚で、それがボランティアであれ、あるいはまた、ビジネスであれ、またその中間的なコミュニティビジネスであれ、いろんな形で取り組めるところから、それぞれ連携と協調で、そのらしさを活かしたまちづくりを行う。そして本当に、さきほども、申し上げたように、住んで良かったというような実感ですね、そして子供たちがまちを出ていったとしても、誇りを持って、河内長野で育ったんだよと言える。そういう風な形で、河内長野がいいまちになっていきたい、いったらいいなと、こういう風に思っております。

増田：ありがとうございます。多分、第1歩を踏み出すことと、継続することということが非常に大きな力になりますので、是非第1歩を踏み出していただいて、継続していただければなという風に思います。ありがとうございます。続いて金田さんいかがでしょう。

金田：最初に、さきほどお話しました、河内長野市産業祭、ふれあい楽市きらく市を、今年も11月の21日の日曜日に、花の文化園で開催する予定にしています。あの、さきほどお話をさせてもらった4団体、横の糸ですね、これをつなげて、少しずつ新しい形を作っていくって、より市民のみなさんに来ていただいて、河内長野市を知っていただく。今もフリーマーケットなどで、すでに市民の方に参加していただいているんですけど、もっともっと市民の方にも、参加していただく、そういう風に企画したいというのと、あと、さきほどからの特産品の開発ですね。そういったものも発展、継続させていきたいと思っていますので、また皆さんも何かいいアイデアがあれば、お聞かせ願いたいのでよろしくお願いします。最後に、さっきの4団体ですね、独自にホームページも立ち上げて、内容も充実したものになっていますので、是非ご覧になってください。これからもよろしくお願いします。

増田：はい、わかりました。さぞ楽しいホームページだと思います。それともうひとつやっぱり、ブランドづくりってすごく大事なんですね。河内長野ブランド、ね。

金田：そうですね。ちょっと話がそれるかもわからないですけども、さきほど先生のおっしゃったように、自立とか自律ですね。たとえば、さっきの4団体でも、農業さんでも河内長野の野菜とか。で、たとえばその、長野の中でも全部まかなえれば、観光だって先ほどの河合寺さんとか、よそまで行かなくてもちょっと自転車に乗ったり歩いたりしていったらいいところがいっぱいある。森林さんとか河内長野の木とかもありますし、長野の中の業者とか、長野の中で事足るもので、ちょっとずつ何かやっていったら、最後には非常に長野らしいまちになって、それが長野のブランドになっていくのかなと思います。

増田：なるほど、ありがとうございます。多分、今、それを難しい言葉でいうと、地域でとれたものを地域で消費しようという「地産地消」という風な呼び方をしてるんですね。これも、大きく、構造、産業の構造が変わったと言えるんですね。大量生産大量流通大量消費というのは、同じ品物をたくさん作りますので、少品種大量生産なんですね。それに対して地産地消というのは、大量の品種の少量生産、多品種少量生産というような、これ、朝市をやると思っててもそうでなかったら困りますし、どこか市場に卸すんだったら、もう白菜だったら白菜だけとか、きゅうりだったらきゅうりだけでいいんですけど、そういう意味ですね。だから多品種、いかに皆で多様性を提供していけるかということを是非取り組んでください。よろしくお願ひしたいと思います。西端さんいかがでしょう。

西端：はい、今後も、続いていますモックルウォークの協力ということで、河内長野に来られた方に、何とか暖かいもてなしを続けようというのもあるんですけども、今ちょっと考えておりますのは、今年の10月の中旬ぐらいに、何とかまち特有の財産とか施設とか、そういうものを使ってまち特有のアイデアを交ぜて、何とかしようというひとつのイベントをしようということを考えています。にぎわいの里復活事業というような仮称で呼んでおるんですけども、たとえば河内長野の駅を降りていただいてですね、住友銀行のところを左にずっと行きますと、長野神社があったり、その先に西條さんの天野酒の酒蔵があったり、逆に右へ行きますと、長野商店街界隈がある。そのエリアを3つのゾーンに分けて、ひとつは長野商店街のゾーン、そして酒蔵のゾーン、それを結ぶ旧高野街道、これをひとつのゾーンというように3つに分けて、それぞれたとえば酒蔵の方では、蔵開きという風なことで、開放していただいて、宣伝もしていただいたら結構ですし、またお酒の歴史や製造工程や試飲など、長野にしかないものですから、それを活かそうということですね。それで、それを結ぶ旧高野街道では、フリーマーケットがあるかストリートミュージックがあるか、何があるかわかりませんが、とりあえず歩いてもらおうと。

かたや、商店街の方側では、にぎわい工房まで人が運んでいただけるように、模擬店であったり、学生たちも何とか引き込もうということで、たとえば空き店舗があれば、まあ、あるんですけれども、シャッターにですね、その、子供たちに絵を描いてもらうとか、何らかのそのシャッターアートと、呼んでいいのかどうかわかりませんが、そういうことで何か、いろんな、立場やジャンルの方をうまく、巻き込むという言い方はいかなのですけども、うまく参画していただいて、ひとつの新しい駅前の、お祭りではないですけど、またなんかやっているよというものをできたらという気がします。ただ、いろんなメリットも、われわれの会費とか、府や市の補助金をいただいたりしているんですけれども、なかなか資金的に非常にしんどいものがあるんです。ですから、ここで多くの方々に、にぎわい河内長野 21 にご参加をいただいて、今考えておりますイベントも、まだこれからやっていこうという段階ですので、是非アイデアを持って、ご参加をいただいて、うまく一緒に作り上げていただきたいという風に思っております。ひとつの PR を兼ねまして。

増田：ありがとうございます。なかなか楽しそうですし、あの、造り酒屋のところ、石川のせせらぎの音と同時に、まちを歩いているだけでも、非常に楽しい、個性のあるところですので、是非皆さんも歩き回ってください。それとやっぱり、さきほどの金田さん、谷口さんも全部共通している、地域づくり、社会福祉協議会の森尾さんからも話がありましたけど、応援団ですよね。いろんな活動をやっているところに、いろんな応援団がお互いに応援団になれば、かなりの数なんですね。人口についてさきほど減りましたと話があり、減っていく傾向がありますという話があるんですけど、同じ人が 2 回、交流したら倍ですよ。交流人口というのは、そういう意味で、たとえば河内長野市さんにだれかが訪ねてきて、という形になると、交流人口というのは活動回数と掛けた数になってくるんですね。したがって、これからやっぱり、人口が減っていきますという話の中で、いかに交流や活動の人口を増やしていくかが、多分非常に大きな元気の源になっていくと思います。従いまして、皆さんがお互いがお互いの応援団になって、金田さんの活動に谷口さんが行き、谷口さんの活動に金田さんが行ったら、これがもう 4 人分ですよ、お 2 人ですけど。そういう考え方でですね、是非進めていただければと思います。ありがとうございます。森尾さん、いかがでしょう。

森尾：前段で申し上げましたとおり、社会福祉法では地域福祉を推進することを目的とした団体、これが社協であると言われております。これからの社協は、どう歩むべきかを考えるとき、やはり、地域に根付いた地区、校区福祉委員会とともに、NPO 団体とも連携し、互いに特性を活かしていくことが大切だと考えます。今、ボランティアの平均年齢が 60 歳をはるかに超えています。最高齢は 77 歳で、受ける側が

回るような形で、活動の担い手になっています。しかし、高齢者に役割があるということは、いきいきと過ごせるということで、大切なことであり、素晴らしいことだと思いますが、各地域、町内での若い層のボランティア参加が是非必要だと考えます。ボランティアこそ、生きた財源であるといつも私は、感謝とともに確信しています。次に、社協と行政の関係についてですが、幸いにして社協はここ十数年で随分変わってきましたし、力も蓄えてきました。これからの社協は、行政に対して政策を提言できるようになってほしいと思います。たとえば、人や組織の問題にしても、社協プロパーが中心になるような時代が来ると思うのです。行政とは、あくまで公益性、公共性のあるものについては、パートナーの形で対等な関係を築いていきたいと考えます。ただし、社協の根幹的なもの、地区、校区福祉委員会、ボランティアの育成などは、社協が醸成し、協働しながら、今後も進めたいと思います。この10年余り、社会全体が福祉に目を向け、人間、人間中心にものを見るように変化してきました。それを受けて、私ども福祉に携わる人たちも、日々の社会の変動に敏感に反応し、常に研修を重ねています。先生も、ご講演の中にもありましたが、私どもでも、プラットホームという言葉をよく使います。言い換えれば、様々な団体がノウハウや資源を持ち寄り、協働すること、その力を発揮すること、併せて、一定のルールなどの下に、地域で問題を抱える人へ柔軟・迅速に対応するという意味があります。大事なことは、生活にとってハード、ソフト、ハート、つまりもの、仕組み、意識はひとつのものであり、多様な人をまちづくりに参加させる社会をつくることです。私ども社協も、是非、そうありたいと願っております。

増田：はい、どうもありがとうございました。最後になりました、市長さんも、大分言いたいことがたくさんあるかと思いますが、所信表明といたしますか、これらに向けてといたしますか、総合計画はこんな取組みでやっていきますよとか、是非、市民と一緒にこんな風にやっていきたいですよという話がございましたらよろしくお願ひしたいと思ひます。

市長：今、そういうご質問をお受けしたのを、これはもう今晚一晩かかってでも、というようにことはたくさんの方にお伺ひしているわけで、ちょっと今は、さきほどご質問された方、申し訳なかつたんですけど、やっぱり、これは行政で進めるものではなくて、住民の意思が大事ですからね。さきほど合併問題をおっしゃった。やっぱり住民のみなさんのご意見を充分尊重しながら、これはいくべきだと、これはもう基本でございますので、そのようにひとつご理解いただきたい。

観客：あの、何もクレームつけるわけではなくて。

市長：いやいや、それは思ってません思ってません、はい。

観客：あの、さっき市長さんが、市としての主体的な判断を示されたっていうことは、非常にうれしいことと思っております（市長：「ああ、そうですか」）。ただ、そういうことが、みなさんに情報提供をもうちょっと頻繁になさっていただければ、皆さんもお分かりになるのではないかと。

市長：そうですね。そういう不安をお持ちの方がやはりたくさんおられる、今はこれだけ、社会的に合併問題が出てきている中で、そういう不安、「どうなるのかなあ長野は」という不安を払拭するためにも、情報をもっと、おっしゃるようになっていきたい。私の方もちょっとその点は、申し訳なく思っております。はい、やはりさきほどからご意見をいろいろいただいておりますように、河内長野らしさ、やはり河内長野の特色ですね、カラー、そんなものをきっちりと出して、個性的なまちづくりを行っていきたい。やはり長野は自然がたくさんある。歴史がある。文化もある。こういうせっかくの宝があるんです。どの市にもない自然がたくさんあるし、歴史だって、大阪市に次ぐ、33市ある中で2番目に多いんです。自然は一番多いんです。この、宝を眠らすのではなく、どう活かし、大勢の方に、やはり、魅力があり、来ていただけるような、まちにという、やはり観光などにつながっていきませんが、こんな景気の悪いときですから、お金落としていただく。ごみばかり落とされたら困りますけれども、お金を落としていただけるような、魅力のあるまちづくりは、絶対にこれは、ひとつの長野の今の生きる道ではないかと思えます。こんな景気の悪いときに企業に来てくれといたって、なかなか来ませんしね、だから、そういう方向で、せっかくある宝物、自然を活かしながら、やっていくべきということで、私も、そういう方向にこれからも進んでいきたいと思えます。

それから、ここでちょっとなんなんですけど、今後、戦後ベビーブームで、大勢の方が退職される時期が来ます。昭和21、2年ごろにお生まれになった方、長野なんかは、相当外から一挙に大型開発で団地に入ってこられましたから。それをどうその地域で、そういう方に生きがいを持っていただいて、地域へ帰ってきていただいて、いろんな経験、知識を活かしてもらえよう、なにかそういう施策を講じていかなければいけない。それが地域の活性化に大きく、つながってくるんじゃないか、その辺を考えていきたいと思っております。さきほど申し上げましたように、これから自立、地方分権が進んでくる。やっとな、三位一体の改革ということで今、盛んに言われておりますけれども、この三位一体というのは、皆さんもご存知のとおり、一つ目は国庫負担補助金、二つ目は地方交付税の問題、最後の一つは税源移譲、この税源委譲がほしいんですよ、地方は。税金を、税源を、しかも基幹税ですね、おかしな税金をもらっても困りますけれども、タバコ税などはじめ言ってい

ましたけれど、あんな先細りしていったって、タバコは吸うな吸うなと言われて先細りするようなものはこれは困りますけど、所得税、基幹税を基にしてですね。そして今まではみなひも付きです、補助金は。ひも付き。ひも付きだから、国の流れに沿ってしか、ある程度使えないんです。そうするとね、中央集権です。地方が全部、画一的なまちにしかできないんですよ、そんなひも付きの補助金でやっていたら。これからはそうじゃないんです。税源移譲されてきますから。税源移譲されて、自由に地方で使ってくださいということになります。地方はこれから苦しいですけども、いろいろ知恵と工夫を持って、個性的なまちづくりがいよいよこれからできていくという時代に入ってくるはずですよ。だから、私はこれから、魅力のある、地方の特色を活かした、自立したまちづくり、個性のあるまちづくりに、都市間競争に入ってきますから、都市間競争、よその市との競争に入ってくる時代です。だから、決して参ってはおられない。

ということで、大いにこれから職員一丸で知恵を絞り、創意工夫しながら、一住民、一市民の皆さんのご要望なり、いかに、税金の使い方ですね、要は。効率よく、皆さんが今、何を望んでおられるのか、そこを的確に捕まえて、やっていかなきゃ、これから都市間競争には勝てない時代。そういうことを、腹をしっかりと据えて、まちづくりを進めていきたいなこう思っております。

増田：はい、わかりました。この次の20年に向けてという話で、今回の総合計画についての、力強い発言をいただきました。一応時間が来ましたので、そろそろにしたいと思いますが、私の方も、コーディネーターとして2、3分いただいて、今日の議論をまとめたいと思います。今日出てきた話の中で、今まさに、最後に市長さんがおっしゃったように、これから都市間競争が起こる。この近辺でいうと、南海高野線沿いで、堺市に負けるのか、あるいは橋本に負けるのか勝てるのかとか、そんな話の中で、やっぱり、みなが誇りを持ったり、あるいは自慢できるようなまちに住み続けるためにという話が、これから非常に大事になってくるんですね。で、それはやっぱり、今は共生なりパートナーシップなり参画型という話の中で、これからやっていかざるをえない。あるいは、やっていくべき、という時代に来た。その中で、少し、さきほども共生の話をしましたけれど、お互いが全く同じ考え方をもったら、これは共生ではなくて戦いが発生するんですね、競合関係。蟻同士は競合関係で戦いをします。ところが、蟻とアブラムシといたりアリマキとかいう、あの緑色の小さい虫がありますね、あれとは共生関係なんですね。蟻というのは、非常に歩行能力がある。一方アリマキ、あるいはアブラムシと言うんですけど、あれは蜜を集める能力はすごくあるんですけど移動能力がない。この2つが集まると、蜜を非常にお互いに共有できるという状態になるというのが共生ですね。これは機能が違うんですね、蟻とアリマキの。多分、いろんな団体が交流していくとか、さ

きほどの合意形成の仕組みみたいなものが、とても大事になってくるとか、あるいはいろんな業種の違いをどうするかとか、空間の違いを都心部とつなぎ合わせながらという話とか、単世代ではなくて多世代でという話が、みなさん全部あります。これ、お互いに差を認め合いながら協力し合いましょうと。70歳の人に20歳のことを期待する、あるいは、20歳の人に70歳のことを期待してもだめなわけですね。お互いに差を認め合いながら共生していきましょうということです。これは行政の役割と市民との役割もそうですし、業種の違いもそうです。そういう意味での、違いを認め合いながら共生をしていきましょうというのが、これから是非取り組んでいただきたいことのひとつです。

もうひとつは、さきほどから出てきている、「らしさ」を見ていくときに、これはいろんなところに、足元を見られて、谷口さんが、市民会議に初めて参画されたという話がありましたが、いっぱい隠れているのですね、足元に。隠れているものを、全然発掘しないのですね。あるだけではやっぱり全然価値になりません。宝石と一緒にですね。宝石も磨かないと宝石になりません。で、いっぱい隠れた資源というのはたくさんありますので、それを皆でどう発見し、掘り出し発掘し、それを情報にどう乗せていくかという話ですね。先ほどの、造り酒屋の蔵の利用をどう考えましょうかというような話がそうですね。あそこにあるだけでは全然意味がなくて、あれを発掘されて、どう今度情報へ乗せていくかですね。そういう風な意味で、それをやっていくともっとらしさというのは出てくると思うんです。最初に、河内長野らしさって何でしょうかという議論をするのはあんまり無意味で、むしろ周りにある資源とは一体何かと、これをどう発掘していくのかということ積み重ねていった結果、河内長野ってやっぱりこんなすごいところなのだということ、ひとつは皆さん日々やっていただきたいし、それを情報交流していただきたいというのが2点目です。

で、もう1点、最後ですが、住みたいまちが訪れたいまちだという信念でやりたい。観光の都市というと、来たことによって迷惑が市民にかかったり住民にかかったりします。これは昔のマス・ツーリズムと言われているやり方ですね。それに対して、今言われているエコツーリズムだとか、グリーンツーリズムと言われているのは、住みたいまちが訪れたいまちとしての魅力があって、お互いにそこで要するに魅力なり、あなたたち、あるいはわたしたちのその魅力をお互いに再確認できる。こういう交換法というのですか、交流のあり方、訪れたいまちであり住みたいまちである、住み続けたいまちであり訪れたいまちであるという形で是非、展開をしていただければということ、コーディネーターとして3つぐらいまとめさせていただいて、今日のまちづくりを、これから考える、きっかけに、一助になったらということをお伝えして終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

